

### 〔能楽〕 研究展望(平成4年)

岩崎, 雅彦

---

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 : 能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

20

(開始ページ / Start Page)

169

(終了ページ / End Page)

186

(発行年 / Year)

1996-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020481>

## 研究展望（平成四年）

岩崎 雅彦

### 単行本

平成四年に発表された単行本・論文に見られた特徴としては、次のような点が挙げられる。まず、展覧会などで能に関する資料が展示される機会が増えたことや、それにともなつて絵画資料に目が向けられ始めたことなどである。また近世

の能楽史研究や能楽資料の紹介が活況を呈したこと、関西勢の活躍が目立ったこと、申年にちなんで猿に関する研究が何点かあったことなども特徴であろう。猿の件以外は、いずれもそうした状況が現在までひき続いて見られ、これらは近年

の大きな潮流とも言える。それとは逆に、数年前までは活発であった作品研究は、この年には不作だった。また近世能楽史研究の活況に反比例して、室町や近代の能楽史の論文は少なかった。能楽論研究はあい変わらず少ないし、演出研究の執筆者が限定されている点も変わりが無い。狂言研究の少なさも例年通りである。また若手の進出が目立つ関西に比べ、関東の状況はやや停滞気味で、かつて完全に東高西低であった勢力地図は、いまや逆転しそうな勢いである。

なお本稿は網羅的な展望を意図したのではなく、重要な論考でありながら扱っていないものも多いことをあらかじめお断りしておく。

『南九州の仮面―祈りと願いの世界―』（鹿児島県歴史資料センター黎明館編。1月。B5判110頁。一六〇〇円）

南九州各地に伝わる面を紹介。カラー・モノクロ図版多数。

『未刊謡曲集 続九』（古典文庫。田中允編。2月。新書判475頁。会員頒布）

〈智恵子抄〉天理教祖と追加〈鶴羽〉宗忠を収める。

『未刊謡曲集 続十』（7月。518頁。他は同前）

〈東光坊く範頼〉を収録。

『能・狂言・風姿花伝』（新潮古典文学アルバム15。西野春雄。2月。新潮社。B6判111頁。一三〇〇円）

図版を中心としたシリーズの一冊。絵に造詣の深い西野氏らしく、古今の豊富な絵画資料が有効に配されている。また近年の復曲などの舞台写真を多く掲載しているのも特色。竹西寛子氏のエッセイも載る。

『中世芸能人の思想 世阿弥あとさき』（堂本正樹。2月。角川書店。B6判299頁。三八〇〇円）

今様・管弦・平家琵琶・能・狂言の五種の芸能について、

各分野の芸論を題材に論じる。能では世阿弥・金春禅竹・金春禅鳳・金春安照・徳田隣忠、狂言では大蔵虎明の著作を取り上げてはいるが、むしろ論じられることの少ない能・狂言以外の芸論を扱っているところが、独自の点であろう。いっものながら堂本氏の能に限定されぬ広範な知識と関心の広さ、そして旺盛な執筆意欲には驚かされる。雑誌『テアトロ』の連載をまとめたもので、「中世芸能・芸能書年表」を付す。

『若狭猿楽の研究』（須田悦生。2月。三弥井書店。B6判444頁。三七〇〇円）

福井県三方町の江村家文書を主な資料として、気山座・倉座など若狭猿楽の南北朝から現代に至る歴史について考察する。資料編として江戸後期の鷺流狂言台本を翻刻、「若狭猿楽年表」を付す。

『松井文庫名品展Ⅲ 能面と能装束』（熊本県立美術館編。2月。変形A4判191頁。二五〇〇円）

能面・装束・楽器の他、五番綴松井本、伝細川忠興筆元和六年能番組のカラー写真を掲載。「松井閑花（祥之）略年譜」、増田正造氏「能の面と装束」、高浜州賀子氏「松井家と能」、「松井家略系図」等を収める。

『関東の仮面Ⅱ 日光山輪王寺の仮面』（町田市立博物館編。2月。B5判101頁。一二〇〇円）

神事面として北斗七星の面（南北朝～室町時代）や、応仁三年鶴若大夫施入の女面を始めとする室町～江戸期の能面の写真を多数掲載。同博物館は個性的で質の高い展示（しかも入

場無料）で評価が高いが、本展も高水準で、ほとんどが初めて紹介されたもの。北斗七星の面は他に類例のない造形で、常行堂修正会に用いられたものらしい（『日本庶民文化史料集成』二「田楽・猿楽」所収『常行堂修正故実双紙』297頁参照）。能面も古様を示し、しかも十五、六世紀の年記を持つものが多い点が貴重。年記を記すのは、奉納品であるがゆえの現象であろう。関東での猿楽の活動を具体的に窺わせる点でも、きわめて有意義な展示であった。

『狂言歌謡研究集成』（池田広司編。2月。風間書房。A5判97頁。二七八一〇円）

狂言謡および小舞謡に関する詳細な注釈。底本は狂言謡は和泉家古本抜書を中心に、小舞謡は享保保教本を中心にしてはいるが、天正本や各流派のものも収められており、表題どおり狂言歌謡研究の集大成と言える。

『実鑑抄系伝書（上）』（能楽資料集成17。法政大学能楽研究所編。表章校訂。3月。わんや書店。B6判285頁。四〇〇〇円）

江戸初期に真嶋円菴照三（秋扇翁）が編んだ『能優須知』『観世音御太夫伝書』『実鑑抄』『能舞台等故実説』の四書を収める。傍記の類が多いため、活版印刷ではなく、ワープロ原稿をレーザープリンターで印刷、これを縮小してオフセット印刷した。先端技術を率先して取り入れ、素早く結果を出す表氏ならではの仕事と言えるだろう。

『談山神社文化財目録 美術工芸・文書編』（談山神社文化

財調査委員会編。3月。B5判72頁。非売品)

翁面・能面十五点を含む。内容は詳細を極めるが、それだけに目次がないのが不便。

『踊る姿、舞う形―舞踊図の系譜―展』(サントリー美術館編。3月。変形A4判81頁。二〇〇〇円)

神戸市立博物館蔵『観能図屏風』、早稲田大学演劇博物館蔵『狂言古図』、絵入り謡本「百万」、三時知恩寺蔵『能絵巻』、国立能楽堂蔵『能楽図帖』のカラー図版、東京芸術大学芸術資料館蔵『信西古楽図』、日本大学総合図書館蔵『魔仏一如絵詞』、東京国立博物館蔵『七十一番職人歌合絵巻』、法政大学能楽研究所蔵『二曲三休人形図』のモノクロ図版を載せる。

『仮面の神々―土佐の民俗仮面展』(財団法人高知県立文化財団歴史民俗資料館編。3月。B5判160頁。一〇〇〇円)

後藤淑氏「高知の仮面から」、高木啓夫氏「仮面文化と宗教文化と」を収録。室戸市吉良川御田八幡宮を始め、高知県に伝わる面を集成。カラー・モノクロ図版豊富、解説も詳細で充実した内容。

『豪華コレクション 三井家旧蔵能面』(清水真澄。4月。学習研究社。変形B4判193頁。二五〇〇〇円)

田辺三郎助氏「日本の能面」、清水真澄氏「能面の美と表情」、清水実氏「能の宗教性―翁と摩多羅神の原像―」、橋岡一路氏「おもかげと花―能面の写しと修復について」を掲載。『法政大学能楽研究所蔵能楽文献資料展 出品書目と解題』

(法政大学能楽研究所編。4月。B5判14頁。無料)

法政大学能楽研究所の創立四十周年を記念して、国立能楽堂と能楽研究所の共催で行われた展示(於国立能楽堂展示室)の目録。写真十三点掲載。同展では百五十点を越える資料が展示され、その質の高さと量の豊富さに改めて感心させられ、同時に蒐集と保管に携わって来た人たちの見識と努力を思った。惜しむらくは、狭い展示スペースに多くの資料を並べたため、美観や見やすさの点でやや問題があったように思う。貴重な資料であるだけに、大量の物をあまり窮屈に並べると、一点一点のありがたみがどうしても薄れるというものである。もう少しテーマを絞るか、点数を減らした方がよかったのではなからうか。

『岩波講座能・狂言』別巻「能楽図説」(横道萬里雄編。5月。岩波書店。変形A5判574頁。五三〇〇円)

昭和62年1月に刊行が開始された講座(全七巻・別巻一冊)が、足掛け六年を費やしてようやく完結。能楽史略年表、猿楽諸座関係図、能・狂言演目一覧、謡・楽器・所作、舞台・道具・面・扮装についての一覧を掲載。

『能狂い』(大河内俊輝。5月。三月書房。A6判331頁。二〇〇〇円)

新聞紙上などに発表した観能に関する短い随想を集めたもの。

『大蔵虎光本狂言集 四』(古典文庫。橋本朝生編。5月。新書判460頁。会員頒布)

江戸後期の大蔵流八右衛門家七世虎光の狂言台本の校訂本。原本は散佚、四種の転写本により校訂。全四冊のうちの最終冊。全十六巻のうち巻十三〈岡太夫〉から巻十六〈泣尼〉までを収める。虎光と転写本四種についての解説を付す。

『能楽覚え書帖』（森田光春。6月。能楽書林。B 6判246頁。二五〇〇円）

〈翁・三輪〉「一声・アシライ笛・序之舞」および各曲の小書についての解説。他に著者の父操氏の門弟鹿嶋清兵衛の評伝、清水市鉄舟寺に伝わる義経の「薄墨の笛」の紹介など。小書の解説は詳細で役に立つ。

『野上記念法政大学能楽研究所創立四十周年記念 第四回 試演能 鐘巻』（法政大学能楽研究所編。6月。B 5判18頁。無料）

山中玲子氏〈鐘巻〉復曲にあたって、表章氏「菟書（集書）四十年」等を掲載。

『能面変妖』（堀上謙。6月。朝日新聞社。B 5判145頁。五一〇〇円）

能面に焦点を当てた写真集だが、すべて舞台での実演写真を用いているのが特徴。「能面芸談」として能楽師の芸談から能面に関するものを抜粋、転載。

『世阿弥配流』（磯部欣三。9月。恒文社。B 6判286頁。三八〇〇円）

『金島書』の構成に従って、世阿弥の佐渡配流の足跡をたどる。写真豊富。

『能楽盛衰記 上・下巻』復刻・増補版（池内信嘉著。西野春雄補。10月。東京創元社。A 5版二六頁。一八五四〇円）

大正十四、五年に能楽会から発行された書の復刻・増補版。上巻は江戸の能、下巻は東京の能付研究編。附録として薪能の図、町入能の図、各一枚を付す。本書は江戸時代、近代の能の歴史に関する総合的考察として、いまだに唯一のものと

言ってよい。下巻に西野春雄氏による「『能楽盛衰記』解題」

「池内信嘉年譜並びに著作年表」を付す。

『瑞巖寺』（仙台市博物館編。10月。変形B 4判98頁。一五〇〇円）

「瑞巖寺―陸奥の禅刹と伊達政宗―」展の図録。室町〜江戸期の能・狂言面三十七点のうち、古面十二点のカラー写真を収める。

『中世若狭を駆ける―若狭武田氏とその文化―』（福井県立若狭歴史民俗資料館編。10月。B 5判79頁。一五〇〇円）

若狭能倉座の能面三点の写真を掲載。

『政所若宮八幡神社の能面・能衣装』（中村保雄解説。10月。政所創意と工夫の郷づくり委員会。B 5判68頁。二〇〇〇円）

滋賀県神崎群永源寺町に鎮座する政所若宮八幡神社所蔵の能面・能衣装の図録。面・衣装をカラー、面裏をモノクロで掲載。

『能道成寺』（別冊『太陽』日本のこころ79。増田正造監修。10月。平凡社。変形A 4判152頁。二二〇〇円）

山中玲子氏「『道成寺』を披く」、佐伯順子氏「道成寺伝承の深層―現地を訪れて―」、堂本正樹氏「『鐘巻』と『道成寺』―龍と蛇・被きの女ふたり―」、児玉信氏「『道成寺』の流れと変容―歌舞伎から民俗芸能まで―」、小田晋氏「太母と蛇―『道成寺』の深層心理―」などを収録。

『猿の文化史―猿と日本人、その歴史と信仰、芸能をさぐる―』(大阪人権歴史資料館編。10月。B5判71頁。一三〇〇円)

古代から現代に至る猿の文化史についての資料を集成。図版多数で楽しい内容。34頁の月岡耕魚筆『能楽図絵』の「猿舞」は耕漁筆「猿座頭」が正しい。

近年、能の絵画資料や古能面の展示される機会が増えていくが、そうした情報を丹念に調べ、美術館などにこまめに足を運ぶことが、これからますます必要になってくることは間違いない。また情報の入ってきにくい地方の博物館・美術館の図録などにも、できる限り目を通しておく必要がある。

## 論文

### 【絵画資料研究】

前回の研究展望(18号)でも少し触れたが、近年、能の絵画資料に対する関心が高まっている。瞬時に消え去る宿命の芸能にとって、その時点でそれを描き留めた絵画の資料的価値は高い。絵画資料は豊富な量の情報を提供してくれる。その情報には文献資料では伝えられにくい性質のものも多く含

まれる。歴史学の分野では絵画資料を用いた研究が多く、成果を上げており、その有効性が証明されている。また文学の面でも、これまでどちらかと言うと等閑視されてきた挿絵などの絵画資料を基にした研究が増え、歌舞伎の分野でもこうした研究が盛んになってきている。しかしながら、能の研究者に関しては天野文雄が『翁猿楽研究』(平成7年)で批判しているように、それらの価値や、個々の資料の存在自体にも十分な関心が払われているとは言いがたいのが現状である。能の絵画資料の紹介も主に美術史の研究者によってなされている。

絵画資料の活用が能の研究に幅広い視点を導入し、特に演出史や、上演・興行形態の解明に多大な成果をもたらすであろうことは、容易に想像ができる。そのためには天野氏も提唱するように、こうした絵画資料の体系的な整理が必要である。能の絵画資料の全目録の作成を目指すことは不可能ではない。吉田漱氏も「気になることは、歌舞伎に関してはたいへん大量の絵画資料があるにもかかわらず、能・狂言についてはどうも少ないということである。で、実はもっとたくさんあるのではないかというのが、私の考え方で、(中略)新しい資料発見も含めていずれば、もっと大きい本が出ることを期待している」と注文している(次掲『暁斎』)。こうした基礎的にかつ重要な作業はまだ誰もやっていない。これはつまり、能の絵画資料を研究テーマとする研究者がいないということ、言い換えれば、この作業に取り組むものがただちに

この分野の第一人者になり得るといふことでもある。だからというわけではないが、こうした新開地に鍬を入れる研究者の登場が待ち望まれている。もっともそれには能と美術史の両面の知識が要求されるわけだが、これからはこうした分野横断的な視点と発想を持った研究者が必要なのである。

※

『暁斎』（48号。12月）は西野春雄氏の講演筆記「河鍋暁斎と能・狂言」、同氏「能・狂言面之地取画巻」紹介・解説」、吉田漱・西野・藤城継夫氏によるシンポジウムの筆記、森康尚氏「画家で狂言師―暁斎『狂言つくし』シリーズA・Bについて―」等掲載。暁斎やその娘暁翠の能・狂言画の図版を多数掲載。他に大蔵弥大夫虎重と虎勝が暁斎（狂斎）に与えた免状三通の写真も載せる。『能・狂言面之地取画巻』は、暁斎が深川の宝生九郎宅で書いた面の地取（下絵）で、鹿嶋清兵衛旧蔵、鴻山文庫を経て、現在は河鍋暁斎記念美術館の所蔵となっている。

河鍋暁斎（一八三二～一八九）は、能楽研究者には能・狂言画家として有名であり、また大蔵弥大夫家の狂言を学び、素人ながら三番三の免状を受け、明治初年の吾妻能狂言や、梅若舞台の本狂言に出演したこと、また宝生九郎と親交があったことなどが、かつてから知られていた。この暁斎は近年まで一般での知名度は低く、雑画家・風刺画家といった一面的で誤った低い評価しかされなかつたり、あるいはせいぜい異端・奇想の画家と評される程度で、美術史上傍流の存在とし

て軽視されてきた。しかし河鍋暁斎記念美術館の精力的な研究・紹介活動によって、暁斎の真の姿が徐々に正当な評価をされ始めている。昭和60年の板橋区美術館における「河鍋暁斎」展、『日本の美術』325号「河鍋暁斎と菊池容斎」（平成5）、そして平成6年の江戸東京博物館における「河鍋暁斎と江戸東京」展によって、その実力に圧倒された人は多かつたはずである。暁斎は狩野派と浮世絵の両方を学び、江戸から東京へという変革の時代に生きたこともあって、画題においても技法においても、文字通りあらゆる種類の絵を描いており、しかもそのいずれもが一級品である。これほど幅の広い業績を残した画家は日本美術史上でも稀であろう。異端の画家どころか、暁斎は北斎と並んで19世紀の日本を代表する天才画家であった。むしろこれだけの質と量の作品を残す画家がこれまで埋もれていたことの方が不思議である。この暁斎が美術史上の正史から削除されてしまったいきさつについては、佐藤道信氏「評価の変遷」（前掲「河鍋暁斎と菊池容斎」所収）に詳しいが、同氏の説くように美術史には、こうした「作られた歴史観」が多く、さまざま理由により正当な評価を受けないまま眠っている作家や作品がまだまだあるに違いない。この大画家が能・狂言に深い関わりを持っていたことに、能楽関係者はずっと誇りを持ってよい。

〔絵画資料利用上の留意点〕

絵画は写真と違い、現実そのものを描くとは限らない。純粋に芸術として描かれたものであれ、あるいは記録を目的と

して描かれたものであれ、そこには描き手の主観が入り込む余地が大きい。まず芸術的目的で描かれたものに関しては、あくまで絵としての芸術的完成度が何よりも優先するから、そこにはさまざまな意図的なデフォルメやアレンジが加わっているのが普通である。また絵師は絵の専門家ではあっても能の専門家ではないから、無知や誤解によって描写が不正確になることも考え得る。また記録を目的として描かれたものでも、能の演技を正確無比に写し取ることは至難の業であるし、ましてそれが素人の筆になるものであれば、描写技術にはおのずと限界があり、全面的に信を置くわけにはいかない。絵画資料に遭遇すると、写真と同じようにそこに描かれたものをそのまま信用したくなるものだが、一点一点の資料の信頼度についての検討が必要なことは、文献資料の場合も絵画資料の場合も全く同じである。絵画資料の場合は、特にこうした限界を常に含んでいることを認識しておく必要があるだろう。もちろん基本的には描かれたことを信用する方向で考えていくべきだが、個々の描写と事実の違いを見極めることが重要である。例えば小林古径の「松風」の絵は、シテとツレの面が下ぶくれのお多福のような面であり、背後の松が非常に大きく描かれている。これらが近代絵画特有の極端なデフォルメであることは誰でも気づくことだが、近世以前のものに關してもそうした注意が必要である。実演と絵画の違いについては前掲森康尚氏稿が具体例を挙げて検討している。また前掲シンポジウムで西野氏が引かれた大和田建樹氏の文

章にもこのことに関する記述があり、参考になる。また異なる場面を一つの画面の中に描き込む異時同図的表現もしばしば見られるので、気をつける必要がある。

#### 【文献資料研究】

西野春雄氏「弱法師の新出異本」(『宝生』3月)は、八戸市立図書館蔵南部家旧蔵番外謡本(弱法師)の紹介と考察。世阿弥自筆本と現行本の間をつなぐものとして貴重。

樹下文隆氏「『四座御役者手鑑』の翻刻と解題」(『国文学研究資料館紀要』18号。3月)は、鴻山文庫旧蔵、国文学研究資料館蔵『四座御役者手鑑』(下巻のみ現存)の紹介。全編の写真を載せるが、不鮮明なのが惜しまれる。同氏「元禄二年刊『能評判』—翻刻と解題—」(『能研究と評論』19号。

5月)は、これも鴻山文庫旧蔵で、国文学研究資料館蔵の資料の紹介。本資料は当時の能役者に関する批評で、他に類を見ない珍しいもの。冒頭と巻末をきわめて鮮明な写真版で掲載。翻刻部分も割り付けに工夫がされていて、たいへん見やすい。なお文中の「鴻山文庫本」は「鴻山文庫旧蔵本」とあるべきところ。

西村聡氏「加賀藩能楽史料としての『御用内留帳』先例調べ—綱紀時代催能記事拾遺—」(『北陸古典研究』11号。9月)は、加賀藩独特の職制である御細工所の史料に記された綱紀時代の演能記録の紹介。

三ツ石友昭氏「彰考館蔵『申楽謡』について—宝生活圃の



新作曲紹介―(『宝生』6月)は、蕉門の俳諧師でもあった沾圃こと宝生左大夫重世作の新作謡「祐養園」の紹介。『国書総目録』がこれの書名を「申楽謡」としているのは妥当ではない、という指摘はその通り。しかし、その妥当性を欠く書名を論文の表題にしたのは矛盾であろう。おびただしい数の江戸期の新作謡曲の中で、特定の一曲の価値をどうとらえ、どう位置づけるかは、非常にむずかしい問題である。

大谷節子氏「『安政六年大倉六蔵東海道紀行文』紹介と翻刻」(『文学史研究』33号。12月)は、大倉宣義が勧進能出演のため、江戸から大坂に向かった際の紀行文の紹介。江戸時代の能役者の旅の様子が窺える好資料。勧進能の祝儀の詳細な書留めも合せて翻刻。

西野春雄氏「明治七年九月若林刊宝生流謡本」(『宝生』8月)は、水天宮前の書肆若林喜兵衛刊の謡本の紹介。東京で最初に出版された宝生流謡本で、諸流を通じて最も早い揃本。同氏「宝生流謡本縁山版小考」(同9、11月)は、安政六年に増上寺の僧了従が刊行した縁山版についての考察。新出の特装本を手掛りとして、刊行者小松了従が加賀の人であることや、版木が前田家に伝わったいきさつ、了従の板橋での開拓活動や、宝生九郎との関係などを論じ、板橋区智清寺に残る了従の墓碑銘を紹介する。一つの発見がきっかけとなり事実が次々と判明して行く過程は、実におもしろく読みごたえがある。一人の人物の足跡が、維新という動乱の歴史をおのずと浮かび上がらせてもいる。

#### 【能楽史研究】

山田雄司氏「摩多羅神の系譜」(『芸能史研究』118号。7月)は、中国を含めた多くの実例を基に、従来芸能神として認識されてきた摩多羅神が、実は伽藍神・守護神であることを論証。後戸や翁猿楽と安易に結びつけられてきたことを批判する。こうした神秘的な神仏については、とかく研究者自身がその神秘性に酔ってしまいがちなものだが、あくまで客観的で冷静な検証が必要なことを改めて認識、反省させられた。この「どえらい新人」(同誌117号彙報)の更なる活躍を期待したい。

田口和夫氏「徒然草第五十三・五十四段の猿楽」(『能楽タムズ』9月)は、足鼎をかぶった仁和寺の法師が『梁塵秘抄』の「我をたのめて来ぬ男、角三つ生ひたる鬼になれ」を謡い舞ったという田辺爵氏の説を引き、それが延年の狂言のパロディであったと推測する。その延年の狂言での扮装がどのようなものであったかが問題となるだろう。田辺説も田口説もあくまで推測の域を出ないのだが、魅力的な説である。なお、足鼎が烏帽子の見立てであったという見解を岩崎「稚児の凶像学」(『国文学』8年3月)に示しておいた。筑摩祭の鍋かぶり、鉢かづき、鉄輪を戴いての丑の刻参り、うかれ坊主の水桶をかぶっての虚無僧の見立てなど、容器かぶりの系譜とでもいったものがあるようだ。五十四段の、稚児を誘い出した法師の行動全体が劇仕立てであったという指摘は卓

見であろう。両段とも狂言として舞台化できるのではないかと感じた。兼好は通説によれば観阿弥とちょうど五十歳違い。成初期の能を見ていたはずである。

岩崎雅彦「楠正成と世阿弥」(『橋香』4月)は、いまだに信用する者が多い上島家文書(観阿弥・世阿弥父子を正成の縁者とする)の資料的価値を否定した上で、観世父子が頼朝や足利などの将軍家ではなく、正成に結びつけられた理由を考察する。『太平記』に描かれる正成の戦法が、敵の目を欺くという点で演劇的であることや、死後も大森彦七の催した猿楽の場に現れるなど、早くから正成と猿楽を結びつけようとする動きがあったことを指摘する。

小林英一氏「近世本願寺の能楽―謡初・御節の囃子をめぐって―」(『芸能史研究』119号。10月)は、中世から近世にかけて行われた東西両本願寺の謡初・松囃子と、近世に西本願寺で行われた御節の囃子についての考察。本願寺での演能の実態を具体的に浮かび上がらせた労作。謡初・御節の囃子の一覧表を付す。千賀聖子氏「虎屋隆巴と虎屋弥兵衛」(同)は、手猿楽の虎屋について京都および薩摩での活動を考察。林和利氏「薩摩藩世襲能役者『中西』の研究」(『歌舞伎の狂言―言語表現の追究―』鳥越文蔵編。7月。八木書店。A5判41頁。九八〇〇円)は薩摩藩島津家お抱えの能役者中西家の家系を解明し、初代虎屋長門こと中西長門守秀長の事跡を考察する。

表章氏「演能記録に見る『三番三』の特殊形」(『山本会別

会パンフレット』11月)は、寛永二年から万治二年に至る三番三の特殊形の上演記録八例の紹介。橋掛りで舞う二日目の形が古くからのものであることなどを指摘する。

竹本幹夫氏「江戸時代諸藩における能役者の身分」(『国文学研究』108号。10月)は、江戸時代の諸藩の能を研究テーマとしている竹本氏の一連の論考の一つ。幕府お抱えの四座の役者に対し、諸藩では藩中の武士や町人を能役者として雇っていたこと、彼らは四座の役者との師弟関係を通じて藩の中で地位を得ていたことなどを、熊本藩、毛利藩、津軽藩を例に論じ、家元制度成立の背景を探る。とかく複雑で分かりにくい江戸時代の能役者の身分に関して、これだけ本格的に検討を加えた論考は、おそらく初めてであろう。近松の『堀川波鼓』の背景なども、この論文のおかげでだいぶわかりやすくなった。

樹下文隆氏「能役者と刀―寛文八年猿楽法度をめぐって―」(『鏡仙』405号。9月)は、『柳営日次記』により、寛文八年に四座の大夫などには帯刀を認める通達があったこと、天和三年に帯刀が全面的に禁じられたことを記す。朱鞘の大小を挿して、島原の傾城町に入りびたり、口論の相手を切り殺したという金春大夫の話(『耳囊』巻一)が想起される。また『安住行状之大概』には、金春安住が文政五年の在坂中に帯刀していたことが記される。帯刀の禁令は全国的なものではなかったようだ。

このところ関西では能、特に能楽史の研究がにわかに活発

になり、質の高い論文が数多く発表されている。これには東京から大阪に移った天野文雄氏の影響が大きいと違いないと想像している。その天野氏の「『名代』と『能名代』——近世大坂の能の一面——」(『演劇研究会会報』18号。6月)は、これまでまったく気づかれていなかった能の職制についての考察。近世末期の大坂能界の代表者で職分の統括者である能名代と、近世前期の大坂の勸進能の興行権者である名代の存在を指摘、大坂勸進能の興行慣行に説き及ぶ。近世の能楽史研究はこれまで江戸や諸藩の式楽を中心に展開してきたが、大坂の能の様相が、それらとは大きく異なるということが、天野氏によって明らかにされ始めた。天野氏の一連の論考は江戸時代の能を画的な目で見がちな研究者たちに認識の変換を迫るもので、その意義は大きい。それにしても、大阪転任という境遇をたちまちにわが利点とし、しかも前人未踏の分野を開拓してしまった天野氏の手腕には感服させられる。誰にでもできることではなからう。解明されるべき問題は、それにふさわしい人を得て、初めて浮かび上がってくる。天野氏と大坂能楽史との出会いは、大坂の能にとってまことに幸運なできごとであった。

同氏「吉田家による『翁の大事』伝授の実態——天理図書館吉田文庫資料を中心に——」(『芸能史研究』116号。1月)と、「狂言大蔵家の《翁》秘説——伊達文庫蔵『神道秘密翁大事』をめぐって——」(『能研究と評論』19号。5月)は、改稿の上『翁猿楽研究』に収録されている。

斎藤恵子氏「『無謡一調』管見——囃子方秘伝の一面——」(『芸能史研究』117号。4月)は、大鼓・太鼓方の特殊演奏形式についての考察。天明頃に始まった無謡一調(独奏)の現代までの演奏記録を集成。無謡一調は内々の場で、見巧者を相手に行われた芸であるが、形式や理念の点で茶の湯と共通する所が多いと感じた。

『国文学』12月号は「中世の芸能——パフォーマンスの季節」と題する特集。副題の意味がわかりにくいのは私のセンスのなさゆえであろうか。松岡心平氏「俊頼と芸能」は、源俊頼の道化役者としての性格や、俊頼の家筋が猿楽長者を輩出していることを指摘する。能の研究者が見落としがちな部分にも目を向け、論点をすくい上げる松岡氏の問題意識の広さには教えられる点が多い。黒田日出男氏「放下僧と暮露——『天狗草紙』の自然居士たちの姿を読む」は、放下や暮露の持つ棒状の物が《放下僧》で使われる拄杖と同じものであることを解明、能・狂言・歌舞伎・浄瑠璃などの作り物や小道具の類が歴史画像学に役立つことを強調する。先にこのことに気づかなかつた能楽研究者への批判も含まれると感じた。松尾恒一氏「延年風流(走物)の展開——延年と能の交渉についての一考察」は、能が近世の延年風流に与えた影響を説く。石井倫子氏「風流と能——古市澄胤と念仏風流をめぐって」は、興福寺官符衆徒で北大和の国人古市澄胤と金春禪鳳の関係を論じ、禪鳳の能に南都で盛んに行われた念仏風流の影響を説く。澄胤の文化活動の具体例が興味深い。澄胤と禪鳳の交流に関し

ては、小林静雄氏や能勢朝次氏の先駆的な研究がある。それらの先行論文の存在にも、ひとこと言及すべきだろう。武井協三氏「狂言から歌舞伎へ」は、『狂言尽し』という語をキーワードに歌舞伎に取り入れられた狂言について考察する。

〔能・狂言と近世の芸能・文学〕

武井氏は「狂言から歌舞伎への史的展開は、今日の歌舞伎研究では、比較的軽視されている」とするが、これは能・狂言の側でも大同小異であろう。浄瑠璃や歌舞伎への能・狂言の影響は、それらの成立期から近代に至るまで、さまざまな形で続いており、この方面の研究がもっと多く出てよいはずである。かつては松本亀松氏のような、この分野の専門家がいたが、今は見当たらない。これらの芸能の両方について専門的知識を持つことがたいへんなためであろう。同じ舞台上で演じられる能と狂言のそれぞれの研究者が、比較的是っきり分かれることに対して、他分野の人は意外に感じるようだが(そう感じる方が正しいと私も考える)、聞くところによると、浄瑠璃の研究者と歌舞伎の研究者もはっきり分かれるのだそう。これも部外者から見れば、両者は共通する演目も多いのになぜそうなのかと、不思議に思える。そのことから顧みれば、能と狂言の研究者が分かれることも、それと同じぐらい不思議なことであるはずで、当事者にはそうした特殊な状況が見えにくいということだろう。同時代の兄弟とも言える芸能どうしの間でさえ、こうしたセクショナルリズムがあるのだから、異なる時代の芸能に精通することはなかなか困難な

のだろう。しかし、時代が異なるというのは、実は教科書的文学史による思い込みで、浄瑠璃・歌舞伎の存在した時代に能・狂言は常に同時代の芸能として存在していたのである。

ついでに言えば、俳諧や仮名草子・浮世草子・読本などを少しひもといただけでも、能・狂言がそれらに与えた影響が甚大であることにすぐ気づく。こうした方面の研究ももっと出てしかるべきだろう。江戸時代の能の研究が必要なのは、何も歴史的研究だけに限った話ではない。こうした分野には研究対象が無限に存在すると言っても過言ではないだろう。それはきわめて魅力的な課題であるはずだ。一般に享受史というのは軽視されがちだが、特に能の場合、その近世の芸能や文学への影響は、単純な引用や利用ではなく、ダイナミックな創造活動であった。そもそも能自体が先行文学の影響なしには存在し得ないのであり、そのことを考えても、享受史を二次的な問題ととらえるのは認識不足といえるべきである。世阿弥の能の研究も大事だが、こうした研究もそれと同じくらい重要だと考える。

※

NHK歴史発見取材班「写楽を探せ2 追跡、謎の能役者」(『歴史発見へ』)11月。角川書店。B6判217頁。一六〇〇円)は、NHK総合テレビで平成四年度に放送された番組「歴史発見」の内容をまとめたもの五編のうちの一編で、浮世絵師写楽の正体を論じる。高橋克彦氏が斎藤月岑の『増補浮世絵類考』の記事を根拠に、写楽は阿波蜂須賀藩のお抱え

能役者、斎藤十郎兵衛だったとする。この論は内田千鶴子氏の研究(平成五年発行の『写楽・考』にまとめられている)によっている。浮世絵師東洲斎写楽の正体をめぐっては、多くの人々によって実にさまざまな説が提出されている。そうした中で写楽Ⅱ斎藤十郎兵衛説は、文献資料に基づいた実証的な説で、最も信憑性が高いように思われる。狩野滋氏もこの説を支持し、その当否については能楽史研究者がさらに検討を加えて判定を下すべきだと主張している(『古書逍遙』『宝生』平成4年7月)。たしかに能楽研究者による写楽研究はないようである。近世能楽史研究の活況が言われる近年であるが、この現象はいささか不思議でもある。写楽の正体をめぐる論争は、邪馬台国論争と並んで日本史上最も人気のある論争で、言わば国民的関心事である。いずれも研究者以外の人の発言が多いという特徴があり、それだけにプロの研究者がこの問題に首をつっ込むのを躊躇する気持ちもわからないではない。しかしながら、写楽Ⅱ斎藤十郎兵衛というこの有力な説の検証は、能楽史研究者に課せられた義務であろう。

狩野滋氏「古書逍遙」『江戸と能楽』余滴—24—31(『宝生』1—10月)は、江戸時代の随筆などに載る能楽関係の記事を網羅的に博搜したものの。江戸期の随筆類には、おびただしい量の能関係の記事が見られるが、これを集成しようという意図によるもので、平成元年に出版された『江戸と能楽』(わんや書店)を補うもの。江戸時代の能の研究は、記録や文書などの歴史資料を用いた考証が主流だが、それとは別にこ

のような仕事も大いに意義がある。こうした資料は信憑性がないということ、どちらかというところと軽視される傾向がないではない。記事が事実か否かという基準で考えれば、確かに価値が高いとは言えないが、この類の資料は江戸時代の人々が能や能役者をどのように見ていたかがわかる点で貴重なものである。そういった点や、こうした仕事をしている人が他にいないという点で、狩野氏の仕事はもっと評価されてしかるべきであろう。

『芸能』8月号は「能楽史のなかの女たち」と題する特集号。堂本正樹氏「能楽史の女たち—しらふとの風流—」は、女猿楽についての考察。猿楽は男の芸能という固定観念が強いが、堂本氏の言うように、これは玄人に限定した場合のことであり、素人の女たち(ただし、巫女や遊女としては玄人)が能を演じた歴史は古く長い。天野文雄氏「京観世福王家の智清尼—その事蹟の二、三—」は、観世座の脇方福王家の七代盛信(服部宗碩)の妻智清尼に関する考察。

〔女猿楽・遊女能研究について〕

堂本氏は女猿楽は江戸初期に消滅したとしているが、決してそうではなく、江戸時代を通じて遊廓などで遊女たちによって盛んに能が演じられていた。『吉原雑話』には揚屋の山口七郎右衛門方や、巴屋吉左衛門方に能舞台があったことを記し(狩野滋氏「古書逍遙」『宝生』平成2年9月)、『好色一代男』にも世之介が長崎の丸山遊廓で遊女能を見たことが描かれている。庭の常舞台で、三十五人の遊女たちが、シ

テ・ワキ・地謡・囃子を受け持ち、〈定家・松風・三井寺〉を演じている。丸山遊廓には中二階の五、六間四方の能舞台を中心に、周囲に二階建ての棟続きの各遊女の定部屋があり、客の所望によって遊女が演能したという(日本古典文学大系『西鶴集』上、板坂元氏二二頁頭注二三)。江戸後期にも遊女能が行われていたことは、岩崎が大坂新町を例に論じている(天保二年の遊女能『鍔仙』419号。平成6年1月)。

江戸時代の庶民は能と縁が薄かったという歴史観も、あくまで式楽に限定すればの話であり、それとは別のいろいろな形で能は庶民の生活の中に入り込んでいた。玄人の能に対して、女猿楽・遊女能が傍系のものであることは確かだが、むしろそれだけにさまざまな面白い問題を含んでいるとも言える。資料も玄人の能に比べれば少ないだろうが、そうした資料(特に江戸期の)の発掘・整理自体、これまでほとんど試みられていないのである。これらの研究のためには、まず「女猿楽・遊女能研究文献目録」と「女猿楽・遊女能年表」の作成が必要であろう。

歴史学や社会学の分野では、女性史・女性学の担い手は、ほとんどが女性である(その良し悪しは別として)。能には若手の優秀な女性の研究者が数多くいるが、誰もこの魅力的な問題を扱おうとしないことが、私には不思議でならない。女猿楽・遊女能の研究は、式楽中心の能楽史観に対して、さまざまな問題提起にもなるはずである。女性の問題だから女性が研究しなければならないというわけでもないが、せっかくだ

手つかずの研究対象があり、誰もがその分野の第一人者になり得るのに、こうした状況はたいへんもったいないという気がする。

※

天野文雄氏「久米邦武の能楽研究―『久米邦武歴史著作集』の刊行に寄せて―」(『芸能史研究』118号。7月)は、『忘れられた能楽研究者』久米邦武の能楽研究に関する業績の紹介と検討。平成3年11月に完結した『久米邦武歴史著作集』(吉川弘文館。五巻。別巻一)のうち第五巻「日本文化史の研究」に収められた十七本の能楽関係論稿を扱う。久米については西野春雄氏も「久米邦武のこと」(『橘香』3月)を執筆している。明治期の研究史は等閑視しがちであり、天野氏稿はそうした多くの研究者たちに反省を促した。

〔未開の沃野、近代能楽史〕

近年、江戸時代の能楽史の研究の必要性が唱えられ、またその成果も多く現れているが、一方、近代の能楽史に関して、まだほとんど手つかずの状態と言ってよい。近代の能楽史の研究は、『能楽盛衰記』を初めとして、むしろ戦前の方が盛んであった。より盛んになってもよいはずであるのに、戦後この方面の研究はなぜか振るわない。たとえば、日本統治下の朝鮮や満州で能が盛んに行われ、大連には本格的な能楽堂まであったことや、昭和17年に観世鍔之丞が後楽園球場で戦時新作能〈忠霊〉を演じ、三万の大観衆を集めたこと(近代における競技場での演能の最初。野球場を使用した芸能興

行の例としても初めか)なども、戦後生まれの人たちにはほとんど知られていないのではなからうか。能の歴史を記す概説書の類にも、こうしたことは書かれていない。幕藩体制の下、制度的に比較的安定していた江戸時代に比べ、維新・震災・戦争という激動の時代にあつて、近代の能は波乱に富んだ歴史を歩んで来た。近代能楽史はむしろ江戸時代以上に多くの研究テーマを提供してくれる未開の沃野と言えるだろう。江戸時代の歴史がすべて解明されなければ、近代の研究がでないというものでもないし、各時代の研究が同時に進行する方がよりよい状況と言えるだろう。歴史学における近代史は時代が近いだけにたいへん面白い。能楽史においても、近代の歴史が江戸時代のそれ以上に面白いであろうことは想像にかたくなないのである。

#### 〔歴史学と能楽史〕

歴史学の分野では伝統的に文化史、特に芸能史を軽視する傾向がある。これには歴史学が権力・支配者の歴史を考察する学問として発展して来たという背景がある。また権力者の視点での一面的な歴史観に対する疑問から民衆史の研究も盛んであるが、いずれにしても芸能はそこからすり落ちてしまふ。歴史学の分野から能楽史研究者がほとんど出ないのは、こうした事情による。現在能楽史の論文を書いている研究者は、ほとんどが文学を専攻した者である。能は室町・江戸を通じて、常に最高権力者と支配階級によって愛され、保護されて来た。しかも、単に興味として愛されただけではなく、体

制の儀礼や制度の中に組み込まれ、時には政治の道具ともなり、また争いの火種ともなって歴史を動かしてきたのである。これだけ密接に、またこれだけ長い期間にわたって権力と関わり続けた芸能は、世界の歴史を見ても他に例がないのではなからうか。それほど深く権力と関わっているにもかかわらず、歴史学の著述に能の記述が抜けていることが多いのは、いかにも不自然であると言わざるを得ない。もっとも能楽史の記述も、能の歴史のみを記し、歴史全体の動きの中での位置が見えて来ない場合が多い。まるで一般の歴史と能の歴史とが、それぞれ別個に存在しているかのような錯覚に陥ることがあるのである。

#### 【作品研究・演出研究・能楽論研究】

三宅晶子氏「井阿弥の作風」(『日本文学史を読む』中世。有精堂。3月)は、井阿弥作の能として〈守屋〉を中心に〈吉野静・丹後物狂・通盛〉を考察する。〈守屋〉を井阿弥作と断定してよいかは問題だが、論旨には啓発される点が多い。非世阿弥系の能では、場面場面で中心になる役が違う方がむしろ一般的であったという指摘は重要。古作では現在と非現在の世界の区別が曖昧であるとの指摘も面白かった。

同氏「世阿弥の物まね論——『古本別紙口伝』の位置——」(『国語国文学』〈目白学園女子短大国語国文科研究室〉1号。3月)は、世阿弥能楽論の「物まね」の語を分析し、世阿弥による物まね芸の体系的統一を論じる。抽象論ではなく、具

体的な演技を念頭に書かれているためわかりやすい。世阿弥の心中をも洞察し、血の通った論文になっている。誤植が多いのが残念。

同氏「百夜通いの物まね」(『鏡仙』7月)は、〈通小町〉の〔立回り〕が、室町期には今日のように定型なものではなく、種々の具体的な動作で百夜通いのさまを面白く演じていたであろうことを指摘、直後の「あら暗の夜や」の一句がその演技と有機的に連続しているとす。詞章分析と演出研究を結合させた好論で、短いながら能の研究の醍醐味を味わわせてもらった。

古作の能に関しては成立期の文献資料が少なく、そのため曲の原型や改作の実態をめぐって、多くの推測説が出されるのが常である。確かに理論的にはいろいろな推測が可能で、さまざまな説が出るのが決して無意味だとは思わないが、証拠のない推測の積み重ねや、推測説どうしの論争は、きわめて無理があるのではないかというのが正直な感想である。

内山美樹子氏「『通小町』と毛越寺延年『卒都婆小町』」(『演劇学』33号。3月)は、毛越寺延年の〈卒都婆小町〉と能の〈通小町・卒都婆小町〉の関係を論じるが、こうした先後関係の究明は、それぞれが成立時の形で凍結保存されているならともかく、両者の詞章も演技も常に変化してきているのだから、非常にむずかしい。また現在の毛越寺延年の古態性と個々の演目の古さとは、必ずしも直結するわけではなからう。毛越寺延年〈卒都婆小町〉が「金春権守の原『四位の少将』に近い

ものに、観阿弥の古態『卒都婆小町』に近いものが、大和猿楽座ないし近畿群小座などの手で継ぎ合わされ、平泉へ伝えられた」とするが、まったく証拠がなく、これでは推測というよりも空想であろう。典拠不明としている卒都婆問答の歌については、これ以前に秋山大・牧野和夫・石井行雄氏らによって複数の資料の存在が指摘されている(小林健二氏「弘法大師小町教化説話と能『卒都婆小町』」『国文学解釈と鑑賞』平成6年11月参照)。

山本和加子氏「世阿弥の老体能——老人の舞がかり」をめぐって——(『能研究と評論』19号。5月)は、文章・論旨ともに難解。世阿弥の論と山本氏自身の論とが錯綜する感じなのが、わかりにくい一因か。理論が先にあり、能はそれを基に作られたという前提で論が展開しているようだが、世阿弥能楽論が実作を後に理論化したものであることは常識。山本氏稿は方法自体に無理があると思われる。

飯塚恵理人氏「伊勢物語古注釈と『井筒』——有常娘像の変貌」(『椛山女学園大学研究論集』23号。2月)と「伊勢物語古注釈と世阿弥自筆能本『雲林院』の後場をめぐって——二条后像の造形」(『椛山国文学』16号。3月)は伊勢注数種の各章段を丹念に比較検討している。伊勢注から能への流れは、表章氏の日本古典文学大系『謡曲集』の注や、伊藤正義氏、片桐洋一氏らの研究によって一大潮流となり、多くの模倣作を生み出したが、飯塚氏稿もやはりその枠組の中での再検討という限界を越えられない。伊藤氏らの業績は斬新で画期的



な研究として一時代を画した。新見であったからこそ意味があったのである(この点については前回の展望でも少し触れた)。しかし、古注釈から能へという見取り図は今や常識であり、現在ではそれを論じる論文のインパクトはかえって弱い。こうした研究はよほど独自の視点を導入でもない限り、結局先駆者たちのその縮小再生産にしかなり得ないであろう。

小田幸子氏「恋慕物狂能としての水無月祓」(『国立能楽堂』6月)は、〈水無月祓〉の改訂以前の古台本と改訂後の現行本の比較考察。挿絵として江戸後期の『年中行事大成』の「夏越祓之図」を載せるが、能とは時代が合わず、誤解を招くおそれがある。

樹下好美氏「龍神物の能の成立―金春禪竹の関与の可能性をめぐる―」(『中世文学』37号。6月)は、〈春日竜神〉が禪竹作で竜神ものの嚆矢であること、能の竜神は禪竹が生み出した風体であることを論じる。適確な論で特に異論はないが、貞和五年の田楽能〈廉承武〉についてももう少し考察がほしい。また舞楽の〈還城楽・納蘇利〉や修正会の竜天など、竜は能以前にもすでに芸能に登場している。「能とは関係ないから」といつて切り捨ててしまうのではなく、せめてまえがきでそれらにひとこと触れるだけでも、論文のスケールがずいぶんと違ってくるものである。これは樹下氏稿に限ったことではないが、微視的な検証だけでなく、巨視的な問題意識も持ってほしい。特に若い人たちにそのことを注文しておきた

い。

山中玲子氏「神事の能―室町後期の能作の一側面―」(『国語と国文学』6月)は、現在能の〈舞車・生贄・常陸帯〉、神能の〈和布刈・鶯祭・江島〉が、地方の神事や景観を描くことを指摘、先行する世阿弥の作品とは志向・方法が異なることを論じる。〈室君〉も例として追加でき(次掲岩崎「室君」演出の歴史)参照)、また〈谷行〉や〈石籠積〉の宗教的刑罰も類似になるだろう。

田中貴子氏「作品研究『室君』」(『観世』3月)は、室津の遊女の実態や説話的背景、室明神社での神事、阿弥陀信仰との関係などを考察しながら、〈室君〉はむしろそうした伝承や宗教的要素から一歩踏み出したところで作られており、そこにこの曲の特色と価値があると結論する。賛意を表したい。岩崎「室君」演出の歴史(同。4月)は、〈室君〉の室町後期的特色を指摘、『能本二十五番目録』の「竿ノ哥之能」(〈室君〉説を否定する)。

阪口弘之氏「作品研究『蟬丸・逆髪伝承』―『蟬丸宮縁起』をめぐる―」(同。7月)は、縁起や説経節に関する記述が大半を占める。蟬丸に関してそうした文献や説話的背景が重要であることは十分わかるのだが、室町後期から近世にかけてのそうした伝承の世界と、世阿弥の時代の〈蟬丸〉とが直接につながるかどうかは疑問。何よりも能〈蟬丸〉の作品論としての見解が示されないことに不満を感じる。小田幸子氏「『蟬丸』演出の歴史」(同。9月)は、子方が蟬丸を演じた長

俊時代の例を示し、それが本来の形であったとする。これが本来の形かどうかは、『三道』の「童の能」の項などとの関連もあり、即断はできない。小田氏自身も言うように、子方の利用法については、より広い視点での考察が必要だろう。

大島薫氏「作品研究『一角仙人』」(同。11月)は、一角仙人説話から能への脚色、先行曲からの詞章の影響などを論じる。堅実な論ではあるが、作品論としては物足りない。脚色や先行曲からの影響は当たり前のことなのでは。岩崎「『一角仙人』演出の歴史」(同。12月)は、シテがツレをまねる相舞に狂言(茶壺・鍋八撥)からの影響の可能性を指摘するが、むしろ(石神)や(大般若)の方が近い。

沢井耐三氏「謡曲『栞天狗』の原話―もう一人の六条御息所・郁芳門院―」(『愛知大学国文学』32号。11月)は、本年の作品研究における最大の成果。(栞天狗)のシテ六条御息所が、『源氏物語』の六条御息所ではなく、白河上皇の息女、郁芳門院媞子内親王であることを論証している。間然する隙のない論で、これで長年の疑問が一気に氷解した。郁芳門院が六条御息所と呼ばれ、天狗と関わりを持つことは同氏の『鴉鷺合戦物語』表現考―悪鳥編―(『国語と国文学』昭和57年7月)にすでに指摘されており、大方の能の研究者がこれに気づかないのは迂闊だった。

重田みち氏「能に於ける中国―出立を中心として」(『日本学』19号。5月)は、能に見られる中国的要素を、バサラ元結などの出立を中心に手際よく考察する。後代には引き継が

れなかったようだとしている柄襦は、現在も(西王母)や(一角仙人)のツレなど、唐女出立に用いることがある。

堂本正樹氏「現行曲演出見直し報告」14(『能楽タイムズ』1(8月))は、実演された現行演出を対象とした考察。演出史の研究は現行演出も当然その範囲に含まれるはずだが、こうした研究は堂本氏以外に誰もやっていない。その理由の一つとして、現行演出の研究は研究業績として評価されにくいという点がある。現行演出を学術的に研究することは十分可能なのだが、それを研究論文として評価するシステムがなく、逆に趣味的で価値の低いものと見なしがちな傾向がある。そのような理由から、研究者にはこれを研究対象とすることにどうしてもためらいがあるのである。こうした状況はぜひ改善されなければならない。もう一つの理由は、この研究には実技に関する豊富な知識がいるということである。これには各流の常の型と替の型について熟知していなければならず、並大抵の能力でできることではない。ある流派の替の型が、他では常の型だったりしてはなはだ複雑、そのすべてを把握するのは超人的なことであろう。こうした研究には豊富な観能歴の積み重ねが必要であり、それは文献を調べて論文を一本書くよりもはるかに手間がかかるのである。そのため研究者はこうした領域にはなかなか手を出したくない。足繁く能楽堂に通い、書きたいという情熱が何よりも先にあるような人、つまり《本当に能が好きな人》にしかこういう仕事はできない。研究者にそれを求めることは現状では無理で

ある。また堂本氏は折りに触れて、能評家たちの批評が印象批評や技術評に終始し、演出などを含めた能全体の批評をしないことを批判しているが、これはその能力を有する批評家が堂本氏以外にはいないということでもある。かくして現行演出の研究は、研究者、能評家、どちらの枠にも納まりきらない才人、堂本氏一人の手にゆだねられる。そうした意味でこの連載は貴重で、もっと評価されてしかるべきである。堂本氏自信も述べているように、後世への記録としての意味も大きい。

#### 【狂言研究】

北川忠彦氏「主従言葉争い物」の狂言について（『芸能史研究』17号。4月）は、〈舟ふな・花争・鶏泣・おひやし〉について各流派台本間の異同を中心に考察する。このような言葉争いの狂言が生まれてきた理由や、狂言以外の文芸を含めたより広い背景を知りたいところである。

徳江元正氏「福部の神・勤入」（『山本会別会パンフレット』11月）は、鉢叩・ふくべについて論じ、紀州御坊市蘭の小竹八幡神社のけほん踊や京都の極楽院光勝寺空也堂の空也念仏にも言及する。

山本晶子氏「狂言『鞠猿』の猿引の芸の考察―小道具を中心として―」（『昭和女子大学大学院日本文学紀要』3月）は、狂言の猿引きの芸に使われる小道具に着目し、絵画資料に見える現実の猿引きの芸と比較して、各流派の演出の違いを論

じる。鷲流の赤熊を使った獅子のまねについての考察が眼目。周到な論で、狂言以外の資料を多く集めたことが成功している。能の演出史に比べ、狂言の演出史はまだ成果が少ないが、そうした中で山本氏稿は一つの指針となり得るであろう。

以上、平成4年の研究展望という表題のもとに、まとまりのない文章を記してきた。個々の論文に対する批評から大きくはみ出し、自分の書きたいことを長々と書き連ねた部分も多い。これは、『展望』というからには個々の論文評だけでなく、包括的な見通しや問題提起があってしかるべきだと考えてのことである。また、忌憚のない意見を述べたために失礼な言辭が多かったことと思う。しかし、批判のないところに創造はなく、また展望も開けないと考える。どうかご寛恕を願いたい。